日本語教育、日本語学の社会貢献
―ろう児に対する日本語教育を例に―

庵　功雄

1．はじめに―日本語教育、日本語学と社会貢献―

現在、日本国内の大学では「社会貢献」が大学およびその構成員の評価項目として重要視されてきている。そうした社会貢献が求められるのは各研究分野においても同様である。本稿では、こうした考えに基づき、筆者の専門分野である日本語教育と日本語学が果たしうる社会貢献の例として、ろう児に対する日本語教育を取り上げ、筆者がこの 10 年来取り組んでいる「やさしい日本語」という取り組みに絡めて、この 2 つの研究分野が果たし得る社会貢献の可能性について考えてみたい。

2．「やさしい日本語」という取り組み

本節では、本稿の議論に関わる深く関わる取り組みである「やさしい日本語」について、ごく概略的に紹介する（「やさしい日本語」の全体像については、庵（2016）、庵編（2020:第 1 部）を、最新の取り組みについては庵（2021）、庵編（2021 近刊）を参照されたい）。

「やさしい日本語」は、平時における外国人に対する情報提供の方策の検討から出発した[1]。「やさしい日本語」の対象者は、当初の（定住目的の）成人外国人から、その子どもたち、ろう児などの障害者に拡張している。また、「やさしい日本語」はマイノリティのためのものだけではなく、マジョリティである日本語母語話者にとっても重要な意味を持つことが明らかになってきている（庵ほか編（2019）、庵（2021）、庵編（2021 近刊）参照）。

以上をまとめると、次のようになる。

(1)　「やさしい日本語」の展開[2]

マイノリティのための「やさしい日本語」

居場所作りのための「やさしい日本語」

初期日本語教育の公的保障の対象としての「やさしい日本語」

地域社会の共通言語としての「やさしい日本語」

地域型初級としての「やさしい日本語」

バイパスとしての「やさしい日本語」

外国にルーツを持つ子どもに対する日本語教育と「やさしい日本語」

ろう児に対する日本語教育と「やさしい日本語」

マジョリティにとっての「やさしい日本語」

日本語表現の鏡としての「やさしい日本語」

国際日本語としての「やさしい日本語」

本稿では、このうち、「バイパスとしての「やさしい日本語」」の中のろう児に対する日本語教育を例に、日本語教育、日本語学が果たしうる社会貢献の可能性について論じる。

3. ろう者の祈り

2016 年と 2017 年に朝日新聞紙上に「ろう者の祈り」という連載記事が掲載された。そこでは、ろう者(先天的聴覚障害者)に対する日本社会の無理解によってろう者が受けている精神的負担などが明らかにされている(同連載に加筆したものが中島(2017)である)。以下は同連載からの引用である。

(2) 臼井千恵が勤める新潟市の NPO「にいまーる」。ダイレクトメール(DM)の配達から戻った男は昨夏、何百キロも離れた土地から、心を復活したくてやって来た。職場で聴者たちにいじめられ、20 代半ばにして生きる意味を失いかけていた。

ろう学校に通った彼は、泣くほど日本語を勉強した。でも、尊敬語や謙譲語の使い分けや助詞の使い方など、理解できないことが残った。

勉強をがんばって障害者の受け入れを進めている大学に進む。就職活動をしたが、思い通りにいかなかった。卒業して故郷に帰る。

ある職場でパートを始めた。その日の仕事は紙に書かれ、口頭で説明される。口の形を、懸命に読みとった。

そこまでは良かった。

わからないことを書いて質問すると、周りの表情がさげすみに変わった。

「おまえ、ほんとうに大学を出たのか？」

書いた文章が、少しおかしかったらしい。それからというもの、一日中むごい言葉を浴びせられた。何を言っているかは口の形でわかる。耐える日々が続く。笑うことを忘れた。〈ぼくに生きる意味はあるの？〉

ろう者の日本手話では助詞を使わないことがある。だから、「仕事が終わらせる」などと、日本語としては少し変な文を書くこともある。ろう者にとって、日本語は第 2 言語だからだ。日本の聴者のどれだけが、パーフェクトな英語を話すことができるだろうか。それと同じことなのである。

（朝日新聞デジタル 2016.3.10「ろう者の祈り2 「日本語」の悲劇、見たくない」）

3.1 ろう者の第一言語は日本手話

上記の引用にもあるように、ろう者の第一言語は日本手話である。日本手話（手話言語の 1 種）は日本語（音声言語の 1 種）とは全く異なる自然言語であり、ろう者にとって、日本語は完全な習得言語（第二言語）である。まずは、この点の認識が日本社会に共有されるようになるだけで、ろう者の生きづらさはかなりの程度改善されるはずである[3]。

3.2 日本手話と日本語対応手話（手指日本語）

もう 1 つ押さえておく必要があるのは、日本国内でかなり広く用いられている「手話」は、ろう者の第一言語である「日本手話」とは異なるということである。前者は「日本語対応手話」または「手指日本語」と呼ばれるが、音声言語である日本語に手の動きをつけただけのもの、すなわち、「日本語」の一種である。そのため、日本手話の話者には決して理解しやすいものではない[4]。

4. ろう児に対する日本語教育と「やさしい日本語」

以上の状況を踏まえて、日本語教育、日本語学がろう児の日本語教育に果たし得る可能性について考えていく。本節では、日本語教育が果たし得る役割について考える。

4.1 ろう児と「9 歳の壁」

(2)の引用にも見られたように、ろう者の日本語では助詞の使い方に問題が生じることが多い。ろう児の作文においても、格助詞の間違いが多いという(佐々木・岡 2015)。こうしたことを捉えて、ろう児の日本語習得において、9 歳ぐらいの時期に停滞が生じるとして、これを「9 歳の壁」と呼ぶことがある。

しかし、ろう児が第二言語として日本語を習得する学習者だとした場合、留学生日本語教育に携わっている者なら誰しも、格助詞「が、を」が理解できずにドロップアウトする学習者はほとんどいないことを知っているはずである。そうだとすれば、日本語教育の立場から考えれば、基本的に、格助詞の習得が困難であるはずはないというのが通常の考え方であると思われる。

それにもかかわらず、ろう児に「が、を、に」という基本的な格助詞における誤用が多いとすれば、そうした誤用は日本語教育のアプローチで改善できるはずと考えられる。以下では、この認識にそくして、日本国内で唯一日本手話を用いて教科教育を行っている明晴学園で実施している「「が、を、に」プロジェクト」の概要を述べる[5]。

4.2 ろう児が習得すべき日本語の技能

初めに確認しておく必要があるのは、ろう児が習得すべき日本語の技能についてである。結論から言えば、ろう児が習得する必要があるのは、読む、書くの 2 技能だけであり、聞く、話すの 2 技能は不要である。なぜなら、日本語文が読めれば、音声認識ソフトやノートテーカーの助けを借りて、音声日本語を書記日本語に変換したものを読めばよいし、日本語文を書くことができれば、オンライン上であれば、そのままでも、日本語でのコミュニケーションが可能であり、仮に、音声言語への変換が必要な場合でも、音声認識ソフトを使えば、そうした変換は非常に高い精度で可能になるからである。

以上のことから、ろう児が習得する必要があるのは、書かれた日本語(書記日本語)であると言える(音声日本語が機械的に文字に変換されたものも書記日本語と見なす)。

4.3 音声なしで言語は習得できるか

もう 1 点確認しておく必要があるのは、仮にろう児が習得すべき対象が書記日本語であるとして

も、言語の習得は音声を介さない限り不可能であるという世間一般のビリーフは正しいとは言えないという点である。

「音声なしでも（対象とするのが書記言語であれば）習得可能」ということは、日本の歴史の中にその証明が存在する。すなわち、「漢文訓読」がそれである。古代日本は、政治制度から宗教、学問など非常に多くの分野に関わる概念を当時の先進国である中国から輸入した。その際、当時のエリートたちは、当時の中国語で書かれた「漢文」を読み、「漢文」で文章を書くことによって、こうした事業を成し遂げた（その際、朝鮮半島から日本に渡った「渡来人」の力も大きかったと考えられる）。

このように、「漢文」を読み書きできた当時のエリートであっても、音声中国語はあまり習得できなかったと言われている（東野 2007）。このことは、「書記言語に限定すれば」、音声を介さなくても言語の習得は可能であることの証左であると言えよう。そうであるなら、ろう児（ろう者）が母語である日本手話を通して日本語を習得することは、聴者である日本語母語話者が母語による英語教育（間接法）を通して英語を習得するのと同様のプロセスとして、十分に可能であると考えられる。

4.4 「が、を、に」プロジェクト

以上のことを踏まえて、筆者が明晴学園との協働で行っているのが「「が、を、に」プロジェクト」である。ここでは、このプロジェクトについて概略的に紹介する（本プロジェクトの詳細については、Iori & Oka 2015、安東・岡 2019 参照）。

まず、このプロジェクトの基本となる考え方を紹介する。

上述のように、留学生日本語教育において「が、を」が習得できないケースはほとんどない。それは、次のような母語転移（language transfer）が想定できるためである。

(3) John drank a glass of water.

(4) ジョンが水を飲んだ。

すなわち、英語話者（ないし、英語の基本的な文法構造がわかっている話者）にとって、述語動詞の前に来る名詞句が主語、述語動詞の直後に来る名詞が直接目的語であり、日本語では、主語が「が」（または「は」[6]）、直接目的語が「を」に対応することは容易にわかるので、「が」や「を」の意味を理解するのは容易なのである。この場合、基本的に主語（ガ格）の深層格は「動作主」、直

接目的語(ヲ格)のそれは「対象」である[7](深層格と表層格の違いについては、庵(2012)などを参照)。

そうであるなら、ろう児が日本手話において深層格を理解していれば、その知識を用いて「が」「を」の導入を行うことは、(3)(4)の対比などを使って英語話者に「が」「を」の導入を行うのと同様に、容易であるはずである。

Iori & Oka(2015)で見たように、ろう児は日本手話において深層格を理解していることが確かめられた。具体的には、図 1 のような世界知識にそくした状況では、明晴学園の小学部 1 年生でも、動作主と対象を 100%正しく認識できた。図 2 のような世界知識に反する場合では同様の認識に至るのは小学部高学年からであったが、これは、おそらく聴児でも同様であると考えられる。以上の結果を踏まえ、「が」「を」の導入を行った結果、その効果が確認されている(安東・岡 2019)

図 1 男の子がアイスクリームをなめている

図 2 アイスクリームが男の子をなめている

5. 日本手話引き日本語基本語辞典作成プロジェクト

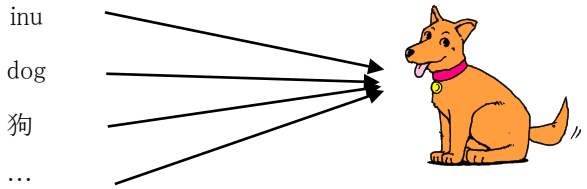
前節では、ろう児の日本語教育に日本語教育の知見が活かしうることについて述べた。本節では、現在継続中の別のプロジェクト(日本手話引き日本語基本語辞典作成プロジェクト)を例に、日本語学の知見がろう児の日本語教育に活かしうることを述べる。

5.1 辞書の必要性

外国語の習得に、文法書と辞書が必須であることは言をまたない。ろう児に対する日本語教育でも事情は同様であり、文法の説明については、(目標言語に関するメタ的言語知識の教育であ

るので）注 5 で見たような問題点は存在するものの、基本的に留学生日本語教育の手法をアレンジすることで対応可能であると考えられる。

しかし、語彙については、これまでの音声言語の話者が他の音声言語を習得する場合の考え方とは異なる考え方をとる必要がありそうである。その理由は、ろう児が日本語（音声言語）を習得する際には、日本語の語を「文字」を通して取り入れなければならない点にある。聴児が日本語を母語として、あるいは、英語を外国語として習得するいずれの場合においても、基本的に、語は「音（ソシュールの用語で言えば、聴覚映像）」として取り入れられる。これは言い換えれば、自ら働きかけなくても、耳に入ってくるということである。一方、ろう児の場合は、音を介さないとすれば、音声言語の語を「文字」を通して「見て」覚えていくしかない[8]。



指すもの（シニフィアン）　　指されるもの（シニフィエ）

図 3　指すものと指されるもの

さらに、語彙については、指すもの（signifiant）と指されるもの（signifié）の対応を覚える必要がある。このことの難しさは音声言語話者が他の音声言語を習得しようとする場合も同様だが、語が表現されるモードが母語（手話言語）における「手形」などと異なる「文字」であることから、ろう児の方が習得に困難を覚える可能性は高いように思われる。

そうしたハンディを埋めるためには「辞書」が必要となるが、その際、まず必要とされるのは、「和英辞典」に対応するものである。なぜなら、ろう児にとって優先すべきことは、自分が母語（日本手話）で表現できることを日本語で表現することであると考えられるからである[9]。「和英辞典」に対応するのは、「日本手話引き日本語辞典」であり、ろう児が自分が調べたい語の手形をモニターの前で実演すれば、それに対応する日本語の語の情報が調べられるというものである。以下では、この辞書作成のプロジェクトの過程で見えてきた課題を述べる一方、その解決に日本語学の知見が活かせる可能性が高いことを述べる。

5.2 分節の原理の違い

まず、言えることは、日本手話（手話言語）と日本語（音声言語）における分節（articulation）の原理の違いである。

よく知られているように、言語は、芸術にたとえると、絵画・彫刻タイプではなく、音楽タイプである。すなわち、言語は全体を一度に捉えることはできず、前から順に処理していく必要がある。こうした言語が持つ特徴を線条性と言う。

ただし、ここで言われる「言語」はあくまで「音声言語」であり、「手話言語」にはこの言明は当てはまらないようである。すなわち、手話言語は線状的というよりも、全体的であり、同時に複数の情報を提示するというイメージである。やや比喩的に言えば、音声言語が下位の部品を時間に沿って集めた上でそれらを組み立てて文を作るのに対し、手話言語では部品を時間に沿って集めてというのではなく、同時に複数の部品が取り上げられ結合されて文が作られているという感じである。

例えば、音声言語である日本語では、「NP1 を使って NP2 を食べる」という行為を（5）のように表現するが、こうした表現の仕方は、膠着語、屈折語、膠着語の違いによらず、基本的に同様であると考えられる[10]。

(5) 道具（NP1）＋で＋対象（NP2）＋を＋食べる

これに対し、日本手話では、「スパゲティを食べる」のと「ステーキを食べる」のが別の手形になる（すなわち、「食べる」という行為一般を表す手形は存在しないか、少なくとも普通は用いられないようである）。これは、「食べる」という動詞が道具格を抱合（incorporate）していると見なせるが、このことを別の角度から見ると、そもそも、ある意味で「全体的」な表現を行う手話言語においては、「NP1 を使って NP2 を食べる」という行為を「道具＋対象物」と分けて表現する必要がないということであるかもしれない。少なくとも、音声言語において（5）のような分節を行うのは、線条性の制約のためであり、その制約がなければ、（5）のように分節する必要はないかもしれないのである[11]。

同様の現象に、品詞の問題がある。

岡典栄氏（個人談話）によると、ろう児の作文で「プールする」のような誤用が見られ、その理由として、「プール」という「名詞」と、「泳ぐ」という「動詞」の区別が日本手話では明示的に存在しない可能性があるとのことである。

動詞と名詞の区別は自明と思われるかもしれないが、英語でも”fish”が「魚（名詞）」と「魚を釣る（動詞）」を表すように、両者が同形になることは珍しくない。こうした現象が見られる背景には「メトニミー（換喩）」と呼ばれる意味作用の存在があると考えられる。

例えば、(6)の「鍋」は「鍋で料理する食べ物（鍋料理）」のことであり、こうした表現は言語が持つ経済性の産物であると見なせる。

(6) 昨日は鍋を食べた。

そうだとすれば、「泳ぐ」という動作で泳ぐ場所としての「プール」という名詞を表すというのは、「魚」という名詞を「魚を釣る」という動作に拡張するのと本質的には同様の意味作用であると考えられる[12]。さらに、先に見たように、手話言語では、深層格を「助詞＋名詞句」に分節して表す必要が少ないとすると、その点から動詞と名詞を区別する必要が少ない可能性も考えられる。

5.3　日本語学の貢献の可能性

以上見たように、「日本手話引き日本語辞典」を作成する作業は想像以上に難しい作業であるようである。それは、音声言語と手話言語の根本的な違いが反映する部分があるためだが、その一方、両者の間には相当程度の言語としての共通性もある。

だとすれば、日本語と他の音声言語の比較で得られている豊富な知見が活かせる部分は数多くあるはずであり、そうした点で今後日本語学がこの分野に貢献できる可能性は高いと言える。

6. おわりに—日本語教育、日本語学の社会貢献の可能性—

本稿では、研究者の社会貢献について考える手段として、ろう児に対する日本語教育を例に、日本語教育、日本語学の社会貢献の可能性について考えた。

ろう児に対する日本語教育を文法と語彙に分けて考えた場合、文法教育には日本語教育の知見が活かせる可能性が高く、語彙の分析には日本語学の知見が活かせる可能が十分にある。今後の課題は、それぞれの分野の研究者が自らの知識や経験をこの分野に活かす方策を真摯に考え、積極的にこの分野に関わること、そのインセンティブをどこに見出すかということであると考えられる。

（庵功雄　いおりいさお　一橋大学国際教育交流センター）

参考文献

安東明珠花・岡典栄(2019)「ろう児と〈やさしい日本語〉」庵ほか編(2019)所収

安東明珠花・矢野羽衣子(2021 近刊)「日本手話と(書記)日本語」庵編(2021 近刊)所収

庵功雄(2012)『新しい日本語学入門(第 2 版)』スリーエーネットワーク

庵功雄(2016)『やさしい日本語』岩波新書

庵功雄(2018)『一歩進んだ日本語文法の教え方 2』くろしお出版

庵功雄(2020)「「は」と「が」の使い分けを学習者に伝えるための試み」『言語文化』57、pp.25-41、一橋大学、https://doi.org/10.15057/71055

庵功雄(2021)「日本語表現にとって「やさしい日本語」が持つ意味」『一橋日本語教育研究』9、pp.123-134、一橋大学

庵功雄(2021 近刊)「2 つの「やさしい日本語」」庵編(2021 近刊)所収

庵功雄編(2020)『「やさしい日本語」表現事典』丸善出版

庵功雄編(2021 近刊)『「やさしい日本語」の関連領域』ココ出版

庵功雄ほか編(2019)『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版

岩田一成(2013)「「やさしい日本語」の歴史」庵功雄・イ・ヨンスク・森篤嗣編『「やさしい日本語」は何を目指すか』pp.15-30、ココ出版

岡典栄・皆川愛(2021 近刊)「日本語対応手話は「やさしい日本語」になり得るか」庵編(2021 近刊)所収

木村晴美(2011)『日本手話と日本語対応手話(手指日本語)」生活書院

佐々木倫子・岡典栄(2015)「日本手話話者と中国語話者の日本語リテラシー : 表記と文法に着目して」『桜美林言語教育論叢』11、pp.1-13、桜美林大学 https://obirin.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=918&file_id=21&file_no=1

東野治之(2007)『遣唐使』岩波新書

中島隆(2017)『ろう者の祈り』朝日新聞出版

Iori, Isao(2017)"Brief Survey of Functional Differences between the "Topic" Marker *WA* and the "Subject" Marker *GA* in Modern Japanese", *Hitotsubashi journal of arts and sciences*. 59-1, pp.15-32, 一橋大学, https://doi.org/10.15057/28991

Iori, Isao & Oka, Norie (2015) "A Preliminary Study on Teaching Written Japanese to Deaf Children", *Hitotsubashi journal of arts and sciences*. 57-1, pp.21-28, 一橋大学, https://doi.org/10.15057/28243

Keenan, Edward L. & Comrie, Bernard (1977) "Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar", *Linguistic Inquiry*. 8-1, pp.63-99

謝辞

本稿をなすに当たって、安東明珠花、岡典栄両氏から貴重なコメントをいただいた。記して感謝いたします。本稿は本研究は科研費（17H02350）の助成を受けたものである。

注

[1] 「やさしい日本語」に関連する研究史については岩田（2013）を参照。

[2] 「やさしい日本語」には、日本語能力がまだ十分でない外国人に対する情報提供や、その人たちとのコミュニケーションにおいて求められるものと、日本語母語話者に求められる適切な日本語表現としてのものの 2 つの種類がある。英語で表す場合、前者は easy Japanese、後者は plain Japanese と訳すのが適切である（庵（2021, 2021 近刊）参照）。

[3] ただし、それだけでは十分ではない。これについては庵（2016:161-164, 212-219）参照。

[4] 日本手話と日本語対応手話の差異については木村（2011）、安東・矢野（2021 近刊）、岡・皆川（2021 近刊）などを参照。安東・矢野（2021 近刊）では、道案内を例に、ろう者にとっての日本語対応手話（実質的には日本語）のわかりにくさが具体的に述べられている。

[5] ここでは、（書記）日本語に関する文法的知識を日本手話によってろう児に説明することを想定している。もちろん、そうした（メタ言語的な）説明は低学年の子どもには難しいため、説明には工夫が必要だが、その難しさは、日本語を用いて英語の文法を（聴児の）小学生に説明する際の難しさに対応するものであり、ろう児固有の問題ではないことに注意されたい。

[6] 「主語」を「は」でマークするか「が」でマークするかは「「は」と「が」の使い分け」の問題であるが、本稿ではこれには立ち入らない（この点について詳しくは、庵（2018, 2020）、Iori（2017）などを参照されたい）。

[7] 述語が非対格自動詞の場合は主語の深層格が対象になり、非能格自動詞の場合には直接目的語が存在しないなどの例もあるが、動詞文の典型が＜主語（動作主＝有情物）が 目的語（対象＝もの）を＞（他動詞）という格枠組み（case frame）を取ることは言語普遍的事実である。

[8] 上記の漢文訓読の場合も、実際の口頭語としての中国語の「音」は用いられなかったが、それでも、日本語に読み替える（訓読する）段階で、日本語の「音」は利用されており、この点は、ろう児が日本手話を用いて日本語を習得する場合とは異なると考えられる。

[9] この点は、（1）で取り上げた「居場所作りのための「やさしい日本語」」において「母語でなら言えることを日本語でも言える」ようになることを最重要視していることに対応する（庵（2016）、庵（2020: 第 1 部）などを参照）。

[10] 屈折語では、道具格のような斜格は格変化で表される（フィンランド語など）か助詞（前置詞、後置詞）で表される（英語、フランス語など）し、中国語のような孤立語でも、こうした格の階層（accessibility hierarchy. Keenan & Comrie 1976）で低い位置の格は前置詞（中国語文法で言う介詞）を用いて表すのが普通である。

[11] 日本手話では助詞が使われないが、これは、音声言語における孤立語などの場合とは異なり、手話言語では、そもそも深層格を「助詞（前置詞または後置詞）＋名詞句」に分節する必要がないためなのかもしれない。実際、古代中国語には介詞はほとんど存在しないが、現代中国語ではかなり広く介詞が用いられる。これは、音声言語においては、深層格を分節して表さないと誤解が生じやすいためと考えられ、日本手話の場合とは異なる。

[12] ろう児における日本語教育の実践とその課題については、安東・岡（2019）を参照。